

初めての本屋さん

関西大学法学部教授 葛原 力三

Wilhelm Sauer, Allgemeine Strafrechtslehre, 3. Aufl. 1955, Hans Welzel, Das deutsche Strafrecht, 11. Aufl. 1969. 研究キャリアのごく初期におそらく初めて洋書肆の店頭にて購入したドイツ刑法の教科書である。時は1982年、場所は神田神保町とおぼしきあたりのビルの一角、怪しい記憶ながら、通りから(中?)二階の入り口に直接上がれる階段があり、ガラス扉には「ショールーム」の文字があったような。結構わくわくしながらこの扉を開けた。大学院に進学したばかりとはいえ既に幾冊かの洋書を購入する機会は得ていたものの、関西在住のため、カタログに添付されていたはがき(!)を使っての注文と折り返しの現物郵送という方式しか知らない。洋書を現に手にとって購入するのはこのときが初めてであったのである。書架に並ぶ群書の中から背表紙の首を横に折りながら慣れない下から上に書かれた題字を苦勞して読み取って選び出し、未だ碌に読めもしないのに開いてみた上で、値段と相談して決断し、レジに持って行く、という、その大半は「本を買う」といえば、通常は想起される流れにすら、正体不明の昂揚を覚えていたことを記憶している。書名ぐらいは読めるものもあるし、見覚えのある著者名も多数並んでいるのが嬉しかったのかも知れない。あるいは、神田で、なんだかそれらしい名前の専門洋書屋さんでドイツの本を買うという行いの、そして買うことができる自分のカッコ良さ。今思い出して書き起こすたびに変な汗が出るほどの幼さである。が、似たような感覚に憶えのある向きもあるのではないかと推察する。

とはいえ、修士論文のテーマもまだはっきりとは決まっていない時期のこと、冒頭に挙げた二書は、決して研究上の必要が分かっている買い求めたものではない。いずれも当時既にやや古い部類に入るもので、教科書というカテゴリーの故かもしれないが、現物を見ることができた中では比較的安価であって、懐具合にもギリギリ適合し且つ、Welzelの名は学部生でも知っている者があるぐらいだし、Sauerも日本の専門論文のあれこれで見ただけで見たことがある有名そうな人だし、というぐらいの認識で購入に至ったものである。ただ、Welzelに関しては、当時の日本では否定的な評価が優勢であったので少し迷った。今振り返ってみれば、動機はいいかげんだが「よくやった40年前の自分、」というところである。発行年から推測するに当時既に版元品切れ状態であったと思われる。よく残っていたと言うべきか。現在でも引用することのあるこの二書を手に入れたことは、初めてのお買い物としては上首尾であったと思う。

もちろんそれは結果論で、乏しい専門知識と語学力と財布の中身の故、購入を決断するまでには、ずいぶんと時間がかかった。「要らない本だったらどうしよう」と経済的怯懦と闘いながら書架の前にほぼ立ち尽くしている私に、上述の昂揚とこの逡巡とが入り混じったおかしな心理状態が挙動と表情とに表れていたであろう、見かねたお店の方がお声をかけてくださった。「大学院生ですか。修士課程ぐらい?」「はい。」「これからですねえ、頑張ってください。ゆっくり見ていってくださいねえ。」それを意図してお言葉ではなかったであろうが、KOパンチである。業界の人から一員と認めて貰ったような気がした。ポジティブな言葉は人を動かす。ふらふらと二書を携えてレジへ向かった。そこでダメ押しである。「両方ちょっと古い在庫なので、少し割引しておきますね。院生さんですし。」洋書が!古いから!割引!?院生だし!?ちょっとカッコ良すぎるやん、それ。心中のスノップとナルシス、ついでに貧乏までもが撃ち抜かれ、ここに私の国際書房推しが確定した。

ただのノスタルジーと嗜う人もあるだろうが、専門文献をpdfでもコピーでもなく書籍として、しかも一旦手に取って目次だけなりとも目を通した上で、そして時として目利きの仲介者とのやり取りを経て入手する(あるいは書架に戻す)プロセスの醍醐味は、貴重な在庫に遭遇できることもある楽しさも含めて、このときに経験したものと今も変わらない。研究者としての能力を発揮すべき重要な場面の一つであるとすら言うことができるであろう。多分、本はなくなるならない。なくなるかなあ・・・